

映画から知る、考える 社会的養護の現状と、その先の知られざる課題

社会的養護とは？

保護者のない児童、被虐待児など家庭環境上養護を必要とする児童などに対し、公的な責任として、社会的に養護を行う。対象児童は、約 4万6千人。

里親や母子支援施設、グループホーム等があり、そのうち約3万人の子ども達が児童養護施設で暮らしている。

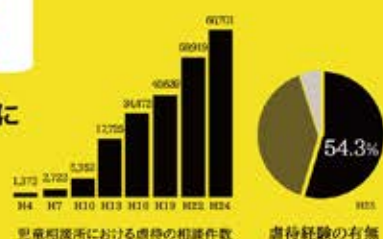


写真の一番上が監督の西坂(当時11才)。
5人の兄妹が同じ児童養護施設で暮らしていた。

施設の児童の約半数が被虐待児

児童相談所における児童虐待に関する相談件数は、H11年度に比べ、H24年度には約6倍に増加。現在も右肩上がりに増加し続けている。(障がいのある子どもも増加傾向にある)

児童養護施設に入所している子どものうち、半数以上は、虐待を受けている。



少なすぎる予算、疲弊する現場

虐待を受けた子どもには十分なケアが必要とされるが、現場の職員やケアワーカーの数はまだまだ足りていない。職員は常に現場の対応に追われ、十分なケアが行き届かない現状がある。そもそも日本では、国から投下される子どもへの予算が先進国中最低ランクであり、社会的養護へ下りる予算も不十分。ケアを拡充するためには予算の拡大が必要である。



施設退所後の知られざる現状

児童養護施設の子ども達は、学校を卒業したら施設を出て就職し、社会の一員となる。しかし、家庭という基盤のない彼ら、彼女らはアパートを借りるための保証人もいない孤独な状況から社会生活をスタートさせる。病気や怪我で仕事を失ったり、トラブルに巻き込まれると、一気に生活が破綻し、路上生活者となってしまうケースもある。犯罪に手を染めてしまうケースや、女性の場合は高い割合で性産業へ就いている現状がある。また、虐待の後遺症や疾患を抱え、生き辛さを抱えながら暮らす人々も少なくない。



映画では、登場人物それぞれが児童養護施設を退所した後に、様々な悩みを抱えている。

私たちに出来ることがあります

社会的養護について話題にする、誰かに伝える。SNSやブログで意見を表明したり、記事をシェアする。地域の子ども食堂や施設へのボランティアに参加。児童養護施設や、退所者をサポートする団体への寄付など。